

言葉によって知ることと 言葉によらず生きること

哲学はまずもって「生きる作法」であるという立場からの議論

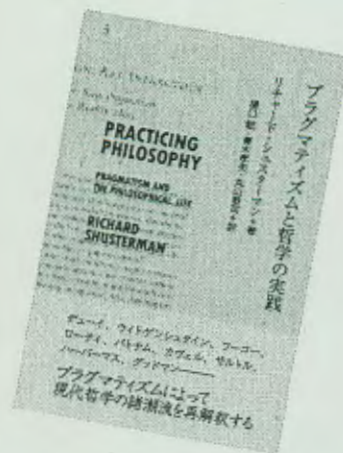
古賀 徹

リチャード・シュスターマン 著
樋口 聡・青木孝夫・丸山恭司 訳

▶ プラグマティズムと哲学の実践

1・10刊 四六判408頁 本体4000円

世織書房



「今日、哲学の教授はいるけれども哲学者はいない」。ソローの有名な、だがいささか手垢の付いたこの言葉の引用から本書は始まる。著者のシュスターマンは、プラグマティズムの立場から、現代の哲学研究が知的な専門研究に特化するあまり、それを語る哲学「者」の身体やその行為から遊離している事態を批判する。彼によると哲学はまずもって「生きる作法 (art of living)」であり、感性的で美的な身体としての行為であり、それによって共同体を形成する実践なのである。

カントは「純粹理性批判」においてモラリッシュシュとプラグマティッシュの概念を区別した。前者は定言命法による道徳的な「べし」に従うあり方を、後者は仮言命法による幸福の追求に従うあり方を表現する。カントによれば前者こそが自然必然性を乗り越える理性的実践的 (プラクティッシュ) なありかたであり、後者はたんに自然の因果関係に従属する恠かな傾向性であって、真の意味での実践ではない。この区別に対してパーズは、むしろ後者のあり方を肯定的に評価してプラグマティズムを定礎したのである。

つまりプラグマティズムによれば、行為の善さは事前の主観の動機や確信ではなく、その行為が世界に対してどのような影響を与えたか、つまり世界のありかたをどのよう

に変化させたかによって事後的に測られる。よく生きていくとする生命のありかたが、行為に伴う因果の連鎖としてよりよいかたで表現されることをプラグマティズムは目指すのである。だとすれば言葉による知のよさ、ただしまた、その言葉に引き続く物質の連鎖によって表現され、実証されることになる。力の概念が物体の運動の変化としてその意味を実証するしかないように、哲学の言葉はそれとかわる哲学者の身体と行為を現実に変化させるかぎり、その哲学者にとっての意味を持つことになるだろう。

だからこそ哲学者はその固有の活動として身体の実践を無視できないとシュスターマンは言う。

プラグマティズムの根幹にあるのは、ある事象の意味はその事象それ自体によつては決まらないうことである。心理主義のように事象に直面する主観の心の働きや、デカルトのように主観の明晰判明さといった、個物に内在する実証不能なものを意味の基底に据えることはできない。その意味を明示的に指し示すのはそれに後続する事態である。あらゆる行為は、先行する事象の意味を表現すると同時にその意味を後続者、他者に譲渡する。その経過のなかで、事象の意味はそのつどつねに書き換えられていく。だからこそすべての事象は連続

しているのである。デュイはこうした連続性をもって成長や教育、民主主義の概念を定義した。シュスターマンによれば、教育や民主主義といったプロセスのなかで結果的に実現されてくる形勢、これこそが美的な連鎖、つまりアート・オブ・リビングを形成することになるだろう。

ある事象が後続の事象に影響を与えてその意味を実証するとすれば、その事象にはある方向性への指示が、つまり運動性が見いだされることになる。シュスターマンによれば、デュイは芸術作品を美術館という枠から解放し、その運動性を回復させようとしたという。作品の意味はその作品それ自体に内在しているのではなく、それが人々の身体にどのような影響を与えたかによって測られる。フリームからの解放と身体運動への働きかけというこうしたデュイの芸術作品論を聞くと、ひとはまずもってミニマリズムを想起するかもしれない。

だがシュスターマンは、はるかそこを飛び越えて、ラッブ・ミュージックないしはピッブ・ホップへと着地する。ポッとは、作者の根源的な創造行為こそが芸術だとする見方を排して、つねにアートを何かの二次創作として実行する美学上の実践である。そこで切り貼られていくように作品、つまり「コピー」として

作品はたんにオリジナルの劣化物ではなく、編集 (リミックス) されたものであり、それ自身が新しい現実性である。そしてその作品が作品として生きながらえるのは、固定された美術館の中ではなく、それがまた次の行為の素材として利用され、次なるアクション——それが作品である身体動きであれ——によって引き受けられ、コピーされるかぎりなのである。そこで作品はコピーの無限の反復連鎖のなかに位置づけられる。そしてその連鎖の中で、言葉もまた生みだされ、そしてその言葉を引き受けてあらたなアクションが生じるだろう。その連鎖が持続するかぎり、それらは意味を生み出しつづける。

最後にシュスターマンは、自らのアイデンティティを問う。それは流動する自己のあり方の根底にあって変化しない本質ではなく、私のアート・オブ・リビングのなかでそのつと実証され、それゆえ継時的に揺れ動き、他者に引き取られ、変化していく。だとすれば私は私の意味、つまり自己同一性を「持つ」とはいえない。シュスターマンもまた、プラグマティスト、いや哲学「者」として、みずからユダヤ性をそのように捉え、人生のアートとしてそれを実証しようとしているように思われる。

(哲学)